

に興味を湧いた。今回の旅はさらに深く掘り下げて研究する機会・時間がなかったけれども、日本文化の種はず

でに私の心の中で根を下ろして芽吹いたと確信している。次回の日本への旅を大変楽しみにしている。

日本における「筆談」に関する調査



謝咏
(浙江工商大学東亜研究院)

2015年12月6日ー25日、神奈川大学非文字資料研究センターからの招へいで、若手研究員として横浜へ向かい、20日間の研究調査を行った。指導教授の小熊先生及び事務室の成田さんを始めとする関係者の皆様から多大な支援をいただき、円満かつ充実した調査ができた。20日間で主に「筆談」に関する調査を行った。非文字資料研究センターの研究室と神奈川大学図書館では、学内のデータベースを通して論文検索を行い、論文と書籍に目を通した。国会図書館と東京都立中央図書館では資料収集などを進めた。

ある事実に気がついた。それは、音声がないため、文字による意思表示が不十分な場合、当事者は往々にして筆談用の紙に図形を書くということだった。

たとえば、日朝間の筆談記録『朝鮮漂流日記』には、7巻の原稿に、81点の彩色挿絵が描かれている。それは地理や方角などをあらわすための地図や地形図のみならず、港口・船舶・人物・衣冠・器具・文房具・武器など多岐にわたっている。地図、地形図、港口(28枚)、船舶(5枚)、人物と衣冠(14枚)、農具、文房具、武器等(19枚)、天候(6枚)、食事(5枚)、その他(処罰、行列)(4枚)なども描かれている。



写真1 小熊教授の案内で常民文化研究所を訪問した

東アジアにみられる独特なコミュニケーションの方法として、言語や民族そして文化の障壁を超越して共有される漢字漢文の筆談は中日間のみならず、朝鮮半島や近世の琉球及びベトナムでも同様にみられる。したがって、千年を越える東アジア地域

の交流のなかには、多くの筆談文献が今なお残されているのである。

しかし中国国内では、資料に限りもあり、また筆談はあくまでも文化を超える交流で、相手国の資料に関する調査が必要になったため、今回の機会を利用して、下記のとおり行った。

1. 王勇教授率いる研究グループに参加

週に一回「筆談研究会」で原資料を輪読しているうち、

文章内容の理解を助けるために挿し入れた絵はコミュニケーションの役割も果たしているが、主な原因としては漢文に熟練していない著者の安田氏は、自分が得意な絵を使い、朝鮮の地方官僚からの度重なる検問に対して解釈を行い、徐々にお互いの理解を得て、また漢文のレベルの向上に伴い、徐々に筆談が展開するようになっていった。その後、対馬の倭館へ向かう途中も、地方官僚や船頭さんに尋ねながら、所在地の確認もでき、路線図もかなりの部分を作成することができた。筆談の文字部分が忠実に原稿にあらわされ、自分が得意な絵(スケッチ?)に丁寧に色彩をつけ、編集を行ったのだと推測した。今後とも視覚による筆談交流は東アジアにみられる独特なコミュニケーションの方法として、ただ単なる意思疎通以外に、東アジアの文人の精神世界をいかに動かすか、場合によっては、文字以外、絵なども重要な役割を果たしたと認識すべきだと思っている。

2. 「千歳丸」の乗員である名倉松窓に関する資料収集

幕末最初の訪中団である「千歳丸」の乗員の紀行文を数多く解読してきた。中でも、「千歳丸」の一員である名倉松窓に関する研究は中国ではほとんど扱われてこなかった。彼はメモ魔と称されるほどの膨大な筆談資料を残し、その筆談を通して、清国の官僚、商人、文人と幅広く人脈をもち、李鴻章からも好評を得て、「中日修好



条規」に大きく貢献した人物である。今回も神奈川大学図書館、国立国会図書館、東京都立中央図書館で、関係論文 26 点、関係資料 13 点を集めた。帰国後、手元の資料と合わせながら研究を進めたいと考えている。



写真 2 資料豊富な国会図書館

滞在期間は瞬く間に過ぎ去って、まだまだ探したい資料も沢山あり、3 週間では物足りない気がした。研究と資料調査以外の時間は、神奈川大学のキャンパスをまわったりした。常民文化研究所、非文字資料研究センターの規模と、整備された資料に感服した。90 年以上の歴

史を誇り、日本国内のみならず世界の民俗研究のトップの位置を占める機関で研究のチャンスを得、本当に幸運であった。今回は暖冬に恵まれ、温かい日も続き、横浜から東京へ向かう途中、白い富士山も見えた。また小熊教授から時折の鰻料理もご馳走になり、誠に充実した 20 日間だった。最後に小熊教授を始めとする非文字資料研究センターの先生方、及び成田紅音さんを始めとする事務室の方々に再度感謝の意を申し上げる。



写真 3 毎日白楽寮から神奈川大学まで通った道

日本における初期の口演童話についての研究報告

Marine PENICAUD
(フランス国立科学研究所 (CNRS) フランス東アジア文明研究センター)



非文字資料研究センターと、私が所属するフランス東アジア文明研究センター (CRCAO) (フランス国立科学研究所 (CNRS) のメンバー) との 2015 年度短期交換プログラムにおいて、2016 年 1 月 8 日から 1 月 27 日まで大学院研究者研究職として非文字資料研究センターに派遣されました。私を受け入れてくださったことに大変感謝しております。

私の研究内容は巖谷小波の生涯 (1870—1933) と、1920—1930 年代における口演童話 (子供に物語を話すこと) の写真や音声資料の調査を通して、口演童話の初期段階を分析することでした。

巖谷小波は近代日本児童文学のパイオニアであり、1895 年には子どものための読み物としてお伽噺という言葉を作りました。出版社の博文館で数え切れないほどのお伽噺を書いた後、彼は 1897 年に学校や公の場で、「読み物」を「聞く物」へと観客に適應させながら、子供たちのための語り部として、彼自身が作ったお伽噺を語り始めたのです。1908 年以降、彼は日本国内のみならず、日本の領土であった満州や韓国 (1913 年)、台

湾 (1916 年)、ハワイ (1926 年)、サハリン (1929 年) へと、講演と口演童話の会のために巡業して回ったのです。1917 年から彼が亡くなる 1933 年まで、博文館の多くの子ども向け雑誌の編集長の仕事と引き換えに、彼は年の半分を上演活動に費やしました。巖谷小波は、その回のテーマに合った俳句、またはことわざを自分自身で掛け軸 (掛け物) に書いて各上演に組み入れていたのです。

彼が活動している口演童話の写真には老若男女問わず、多くの観客が映し出されています。すなわち、彼の人気は子どもたちからだけではなかったのです。上演は屋内でも屋外でも肉声で行われていました。

今回の滞在期間中、私は日本の子どもたちの文化的歴史の一翼を担う巖谷小波の、口演童話に関連する資料の調査を望んでいました。また、彼の口演活動の場所や日にちに関する情報収集その他、写真や録音した音声記録を可能な限り参照したいとも考えていました。

今回の目的は、非文字資料研究センター、日本常民文化研究所を含む神奈川大学図書館で情報を収集すること